

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Cherry Amor Dugtong-yap
論文題目	Diaspora Philanthropy: The Emerging Face of Filipina Permanent Residents in Japan (ディアスポラによる慈善事業－日本に永住権を持つフィリピン人女性の新たな姿－)		
(論文内容の要旨)			
<p>近年、海外に居住するフィリピン人の総数は飛躍的に増加した。この研究は、日本で永住権を持つフィリピン人女性の生活、とりわけ彼女たちのディアスポラ慈善事業に焦点を当てている。これまでの研究では、大きく言えば、フィリピン人移民を「英雄」ないし「被害者」として描く傾向にあるものが目立ったが、本研究は、そうした支配的な理解に一石を投じる新たな語りの提示を目的とする。この二分化論ではディアスポラの人々が海外の生活で果たしている役割の多様性を矮小化しがちである。永住権を持つディアスポラの増加により、多くのものが慈善事業も含めた多様な活動に従事しており、二分化論の根底にある「ディアスポラ＝単純な海外労働者」像では彼らを全く位置づけ切れない。本研究では、日本に永住権を持つ元エンターテイナーのフィリピン人女性四名を取り上げ、多様な活動の1つとして彼女たちが従事している小規模ながら継続的なフィリピン本国向けの慈善事業を分析した。そのために、文献調査と日本とフィリピンで100名を超える聞き取り調査を行なっている。</p> <p>第1章では、一時的な契約労働者よりもホスト国で永住権を持つフィリピン人が増えており、そのことが先の二分化論をますます不適切なものにしていると指摘する。その上で、本研究の4つの課題を提示している。1つ目は、ディアスポラ慈善事業の誕生と発展の批判的検討であり、既存研究が西側諸国の事例に偏っていることを指摘している。2つ目は、ホスト国で永住権を得たフィリピン人移民がどのようにトランスナショナルな慈善事業に取り組んでいるのかという点である。3つ目は、ディアスポラ慈善事業のインパクトを明らかにすることである。4つ目は、個々人の慈善事業家を変革の主たる担い手として分析の主体にすることで、これまでの構造規定論的なグローバル化論を見直すことである。</p> <p>第2章は、グローバル化の動態、移民、ディアスポラ、フィリピン人労働移動、日本に永住権を持つフィリピン人女性に関する既存の研究や理論的枠組を網羅的に再検討している。その上で、人・モノ・技術・サービス・情報のフローの原因とも結果ともなっているグローバル化によって、ディアスポラ慈善事業が可能となっている点を指摘した。</p> <p>第3章では、まず、フィリピン人ディアスポラの本国への貢献の仕方を送金、投資、慈善事業の3つに分類し、それぞれについて概観している。その上で、慈善事業に焦点を絞り、資金や物資提供を行うアクター、そうした提供を求めるアクター、同事業のメカニズム、その受益者へのインパクトを明らかにしている。</p> <p>第4章では、組織を立ち上げてディアスポラ慈善事業に取り組む四人のフィリピン</p>			

人女性のライフストーリーを取り上げている。彼女たちは、エンターテイナーであったことを否定的に捉えておらず、むしろその過去を積極的に生かしてさえいる。本章で取り上げるメリンダ、マリー、ロウェナ、マヤンの四人の女性の人生を見てみると、日本でエンターテイナーであれば、先の二分論で記されたような人生しかないという理解がいかにも誤っているのかがわかる。四人の女性たちは、今では彼女たちの住む日本のコミュニティに見事に根づきつつ、フィリピン本国の出身地との緊密なネットワークを維持しているのである。彼女たちは、保守的な日本社会とフィリピン社会の橋渡し役となっており、こうしたつながりは、ディアスポラ慈善事業を通じても生み出されたのである。

第5章では、四人の女性に共通する4つの要素について検討した。1つ目は、フィリピン人同胞への共感である。この共感があってこそ、ディアスポラ慈善事業は生まれた。2つ目はネットワークである。彼女たちは、バラバシの言うネットワーク論におけるハブの役割を果たし、日本社会と日本のフィリピン人コミュニティ、そしてフィリピンのコミュニティとをつなぐネットワークのハブとなっている。3つ目は、彼女たちがエンターテイナーの仕事で培った技能である。彼女たちは、この技能を最大限に利用して、彼らの慈善事業のために物資の支援、金銭的支援、ボランティア活動を呼びかけることに成功している。最後の共通点は、ディアスポラ慈善事業を継続することで生じた彼女たちのアイデンティティーの変化である。

第6章は、これまでの章を総括し、フィリピン人ディアスポラ研究についての将来展望を述べて終えている。

(論文審査の結果の要旨)

フィリピンは東南アジア最大の移民送り出し国であり、2009年現在で、214カ国に約860万人のフィリピン人が住んでいる。そして、彼らの本国送金はフィリピン経済を支える大きな柱の一つとなっている。フィリピンからの移民というと短期的に移住する出稼ぎ労働者をいまだに想定しがちであるが、実際には2009年の時点で、その860万人のうちのおよそ47%が定住者となっている。この変化がフィリピン移民による新しい動きを生み出している。本論文は、フィリピン移民受け入れ数では第4位を誇る日本を取り上げ、定住化しつつあるフィリピン人たちが始めた新たな試みである慈善事業に着目した世界でも初めての研究である。本論文は以下の点で評価できる。

まず何よりも、フィリピン人の定住化という現象に着目したことである。今後も定住するフィリピン人が増えることは確実であるとはいえ、彼らの日常生活やライフスタイル、本国との関係についてはまだそれほど研究が進んでおらず分かっていないことも多い。本研究は彼らの日常生活に関心を寄せた試みの1つとして評価することができる。

次に、彼らの日常生活の活動の1つとして、彼らによる慈善事業(ディアスポラによる慈善事業)に着目した点も重要である。このディアスポラによる慈善事業とは、海外に移民したフィリピン人がフィリピンの出身コミュニティなどにさまざまな形で行う支援活動のことである。欧米諸国に移民したフィリピン人による慈善事業については、すでにわずかながら研究が存在するが、日本に定住するフィリピン人による慈善事業についての研究は本研究が嚆矢となる。本研究は、ディアスポラによる慈善事業を範疇化して、本研究が取り上げた慈善事業の事例を位置づけることにも成功している。

3つ目に、日本に定住して慈善事業を始めた四人の女性に着目し、そのライフヒストリーを簡潔に記述した後、彼らに共通する4つの要素(共感、ネットワーク、技能、アイデンティティーの変化)を導き出したことである。本論文執筆者がフィリピン人女性であることもあり、この四人の女性と容易にコミュニケーションを取ることができ、広く深く彼女たちのライフヒストリーをすくい上げることに成功している。その典型が、共感(タガログ語で *awa*) という要素を導き出していることである。また、エンターテイナーとして獲得した技能が積極的にその後の生活に活用されている様子を鮮明に描き出している点も高く評価できる。

4つ目に、四人の女性の慈善事業は小規模であり、欧米諸国に住むフィリピン人永住者の比較的大規模な事業とは大きく性質が異なっている点を指摘したことである。直接的な個々の慈善事業のインパクトということからすれば、四人の女性の慈善事業はそれほどでもないかもしれない。しかし、グローバル化が急速に進む中で、本国との人的交流が容易になり、所得がそれほどなくても本国での慈善事業に従事しやすくなっている。それゆえ、日本に永住権を持つフィリピン人が増えることで、家族への送金のみならず、こうした小規模の慈善事業が活発になり、それらを積み上げること

によって生じるインパクトも大きくなりつつある。また、緩やかなネットワークで事業が進められているだけに柔軟性が高く継続性もある。本研究はこうした新たな動きをしっかりと捉えることに成功している。

以上、四点から本論文は日本におけるフィリピン人移民に関する優れた博士論文として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 2 月 7 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。